

《新刊紹介》

石坂尚武著

『苦難と心性——イタリア・ルネサンス期の黒死病——』

石田 和生

14 世紀にイタリアに到来し、次いでヨーロッパ全土において猖獗を極め、筆舌に尽くしがたい被害をもたらした黒死病は、当時の政治・社会経済・文化等あらゆる要素に影響を与えたとされている。社会経済的には、従来の農奴制を——黒死病のみが原因ではないとはいえ——衰退させ、文化面では「死の舞踏」に代表される「メメントモリ」を基調とした一大ムーブメントを隆盛させた。しかし、本書はそうした社会史や文化史的な変化よりもむしろ、歴史人口学的な観点から行われてきた黒死病そのものについての研究を総括し、その黒死病による苦難と不可分な人々の心性の影響にまで話を進めて考察している。こうした心性史的な研究は、従来の黒死病研究ではあまり扱われなかったテーマでもある。では、著者の紹介に移りたいと思う。

本書の著者である石坂氏は長年に渡り、黒死病に関する多くの史料を収集し、研究を進めて来られた。本書は、先年出版された『イタリアの黒死病関連史料集』と合わせて、そうした研究の一つの集大成として位置づけられる著作であると言える。特に、本書は、黒死病が到来し、そのままヨーロッパの風土病化した時代をペスト期として取り上げ、その時代におけるイタリアの社会状況や政治などを詳しく追いながら、時代に特徴的な心性を描き出し、その心性が都市政策にまで現れていたことを指摘するという野心的な試みが成されており、非常に興味深い内容となっている。次に、本書の構成について簡単にまとめる。

本書は、前書きに続いて、第1章と第2章が序論、第3章・第4章・第5章が第1部、第6章が第2部、第7章が第3部、そして第8章・第9章・結語となる第10章が第4部としてまとめられている。加えて、巻末に先行研究の蓄積と著者自身の史料集成の成果として、本書の研究に使用された黒死病における二種類の死者リストが付録として収録されている。それでは、内容の紹介に移る。

前書きでは、研究対象の基本的把握が成され、著者の「「心性」は「苦難」と密接不離なもの」という考えが示される。また、黒死病が奪い去った膨大な人口や、それによる影響と同様に、従来取り上げられなかった残された者の心性への痛撃が、黒死病研究において非常に重大な問題であるという著者のスタンスが浮き彫りとなっている。

次の序論において、本書が扱う黒死病の前提として、「トレチェントの苦難」というテーマで、1300年代に起こった数々の災厄が挙げられている。第1章では、黒死病の到来以前に注目し、気候の寒冷化による凶作の多発と飢饉の発生が示される。これに加えて、イタリアにおいて地震の発生や、英仏百年戦争に連なる大商人の破産が政情不安を生み出していたことが確認される。著者は、黒死病以外のこれらの災厄もまた、研究対象とする時代

に生きた人々の心性に影響を与えた要素の一つとして考察している。

そして、第2章から1348年に到来し、以後周期的にヨーロッパを襲った黒死病について、非常に詳細な著述が開始される。上述したように、著者は心性と苦難を不可分のものとして扱っており、この時代の苦難の最大の原因たる黒死病に関しては、序論中の第2章、第1部、第3部と、非常に多くの紙面を割いて考察している。まず、第2章においては地理学者H.D.フォスターによって作成された歴史上の大惨事を測定するフォスタースケールに拠りながら、黒死病が持つ衝撃の大きさを改めて強調する。加えて、中世の黒死病の病理学的な特徴と感染経路について、当時の史料を用いて考察する。

続く第1部では、「黒死病による苦難を都市・農村のレベルから見る」と題して、黒死病、特に、著者が大黒死病と呼ぶ1348年の猖獗がもたらした惨劇の実態を、歴史人口学の先行研究、特にノルウェーの研究者O.J.ベネディクトヴの研究に依拠しながら説明している。まず第3章において、従来黒死病の被害に関する研究において無視されていた史料に現れない貧民の存在を確認する。その際、著者はベネディクトヴによって提唱された黒死病に関する「標準想定」を使用している。この標準想定を作成は、史料に現れない下層民への考察方法として非常に示唆に富んだものであるように思われる。

次の第4章では、黒死病期のイタリア各都市と農村における人口変動の規模をベネディクトヴによる「標準想定」を採用しながら、実際の年代記の記述にも照らし合わせて比較している。また、従来研究が農村による黒死病被害を過小評価したことを批判する。

第5章では、著者がここまで全面的に依拠していたベネディクトヴの「標準想定」に対しても細かい批判点を提示して、黒死病被害を概観していく。それによると、著者の大黒死病による人口減少の推定は6割前後であり、この数値はベネディクトヴのものに近似するものである。

第2部では、苦難と心性を個人レベルから考察するべく、プラートの商人フランチェスコ・ダティーニが遺したダティーニ文書を用いて、事例研究が行われる。著者は、ダティーニの生涯を史料から追い、彼が遭遇した黒死病に対しどのように対応したかを検討している。そして、黒死病の脅威を前に罪の意識を感じ、悔悛巡礼の実践や死後のとりなしを盛り込んだ遺言書を作成したことから、当時の人々が共有していたペスト的心性と呼べる、同時代的な心性の存在を指摘している。このペスト的心性を軸に、著者は更に論を進めていく。

第3部では、第2部で指摘したペスト的心性への考察を進めるため、1348年以降、即ち、著者が設定するところのペスト期における黒死病の形態について述べられている。それによると、黒死病は1348年の流行以後、死亡率自体は低下しつつも定期的に発生し何度もヨーロッパ各地を襲っていたようである。こうした現象は、次章にて心性の問題と関連して更に考察される。

第4部では、いよいよペスト的心性の内実についての考察が展開され、それに従って、実際に心性の表出が確認される事例が都市政府のレベルから詳察される。まず、前半部分

である第8章では、黒死病による心性の影響が都市政府レベルで見られることが確認され、ダティーニの個別研究から想定されていたペスト的心性と、その根底となる《峻厳な神》が検討される。ここでは、繰り返される黒死病の猖獗が神の鞭として理解されたこと、その結果として、ルネサンス的な人間中心の心性と並行するように、非常に宗教色の強い禁欲的な心性も高まったことが主張されており、非常に興味深い。そして著者は、この宗教的心性こそがペスト的心性の特徴であるとしている。

続く第9章にて、著者は都市政府の施策を挙げ、その背景に潜むペスト的心性を指摘していく。ここで取り上げられた政策は、嫁資公債制度、捨子養育院の設立、奢侈禁止令、ソドミー取締令、女子修道院への立ち入りの禁止、ユダヤ人、近親相姦者、魔女、賭博者の処刑記録である。一見、共通点が見られないこれらの政策であるが、著者はそのいずれにも、善行によって神を喜ばす意図、あるいは悪行への厳罰化によって神の怒りを抑える意図があることを、史料を読み解いて指摘する。そして、この意図の根底にあるものこそが著者が重視する時代の心性であり、その心性を把握することによってこれらの一連の政策にも、心性が政治に現れ出した事例としての価値が見いだされている。このことは、心性を用いて新しい研究の枠組みを構想し得ることを示唆している。

最終章の結語にて、著者は心性について改めて述べている。「心性は本来見えにくい物である。……しかし、心性は、時に人を行動に駆り立てるものでもある」という表現は前書きにて主張された「苦難」と「心性」の一体性を前提としている。著者のこの考えは人間が関わっている限り、歴史の表象には、その時代における人々の心性が内包されているのだということを思い出させてくれている。そして、その心性は時に人々の選択を規定するものであり、心性史以外の研究分野においても、非常に重要な要素なのだということを本書は気付かせてくれているように思う。

本書は非常に長大な黒死病そのものに関する研究書ではあるが、同時に、黒死病という歴史的な事象をきっかけとして、当時の人々の心性を明らかにしようとした著作であると言える。著者自身は、これで充分だとは考えていないようであるが、心性という曖昧なものへアクセスする手法を紹介するものとして、本書には高い価値が認められるように思う。また、黒死病そのものに対する歴史人口学的な先行研究が詳細に記されており、先行研究の総覧としてもきわめて有益な本となっている。

(A5判 521頁 2018年3月 刀水書房 税別8400円)

(京都大学大学院修士課程)